

Title	アメリカにおける日本美術享受の様相
Sub Title	Phases of the appreciation of Japanese art in America
Author	衛藤, 駿(Eto, Shun)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.29, (1970. 5) ,p.35- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美学美術史特集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00290001-0035">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00290001-0035</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# アメリカにおける日本美術享受の様相

衛 藤 駿

## 極西の国日本

「日本はも早極東ではなく、むしろ極西というべきである」といったのは、元アメリカ駐日大使のライシャワー博士である。たしかに現在の国際情勢からいえば東西両世界の断層は、日本と中国大陸との間にあって、多くの日本文化はアメリカを介して西洋に直結しているようにみえる。かつては日本文化の形成に不断の影響を与え続けてきた中国は、地理的には依然として隣国であることに変わりはないのだが、戦後二〇余年を経た今日でも両国間には未だ正式の国交すら回復していない。したがって中国大陸に旅するにも、香港を経由し陸路国境を越えなければならぬ繁雑さは、ジェット機時代の今日では逆にその距離を一層遠いものに感じさせているのである。

一方、日本とアメリカ、および西欧諸国との接近は益々その距離感をちぢめ、かつてマルコポーロが憧れた極東の国の国も、すっかりアメリカナイズされているばかりか、そこにはあらゆる西欧文化の出店が勢揃いしている。この意味で日本はも早「極東」ではなくなり、アメリカを経由したところの「極西」と呼ばれるのにふさわしい国際的地位を得ている次第である。

では一体、今日、日本の文化は、欧米にとって如何なる意味があり、どのように享受されているのだろうか。筆者は一九六五年から

翌年にかけて、ジョン・D・ロックフェラー三世財団の招請により、海外、主として欧米諸国における東洋美術の実態についての調査研究の機会を与えられたので、今日における美術の面からみた西洋の中の日本の姿について多少の感想を得ることができた。

ここではアメリカにおける美術の育ち方に関連して、アメリカという国が如何に異大陸の文化、すなわち西欧と東洋の美術を如何に受容しつつあるか、そして更に焦点を日本美術に対する感じ方、考え方といった問題にしぼって、現時点のアメリカにおける日本美術享受の様相について、一応の概観を記してみたいと思う。

西欧諸国には、伝統的にその国の歴史と風土とに培われた固有の民族感情があつて、隣国の文化すら容易に受け入れないほどであるから、異大陸のそれに至ってはほとんど無縁というべきであり、このことは例えばかつての植民地の実態をみても明らかである。そして西欧諸国が他の世界の文化を受容したときには、単なる異国趣味か気まぐれからであつた。つまり西欧にとつての東洋は、絹や香料に誘われた一種の不安と興味とが混在するエキゾシズムの対象であり、そして征服欲の対象でもあつた。そしてこの態度は美術の分野において一層顕著である。

ピカソがアフリカ土人の民芸品に興味を示したのも——そのこと自体西欧では例外的現象であるが——結局はあれでもないこれでもないの挙句の、気まぐれの選択であり、中世以来の中近東に対する憧憬とも共通したものがある。しかし地球が年々せまくなりつつあることは美術の世界にとつて無縁ではなく、ミロのヴィーナスが日本で展観される時代になれば、日本の美術が浮世絵や根つけでなく、大和絵や仏画、そして水墨画が西欧人の眼にふれる機会も生じてくる。そうすればアンドレ・マルローのように、平安朝絵画の代表作の一つ「寝覚物語絵巻」をみて「これまでヨーロッパが他の世界の美術を認める場合、それらはいずれも野蛮（バルバル）の美術としてであつた。ネグロ芸術しかり、オセアニア芸術しかり、ブレ・コロンビア芸術しかり。しかし大和絵の場合、ヨーロッパははじめて他国の洗練された美術を、その『洗練さ』において認めることになるのだ」といわしめることになるのである。

— といふものの、同じ西洋でも欧州はまだまだマルローという先端的美術批評家においてこの程度であり、西欧における芸術の伝統

はそう簡単にゆるぎはしない。というよりか当分は過去の遺産で喰って行ける筈である。しかしアメリカは多分に事情がちがっている。

## アメリカの美術風土

アメリカの過去は短い。いわゆる開拓時代はその精神において今も終ってはいない。フロンティア・スピリットのある限り芸術は生れても熟れることはなかった。まだそんな暇や気分が醸出していないのである。

現在ではどうか。たしかに世界の流行も音楽も美術もニューヨークを中心に回転しているかにみえるし、事実そういえないこともない。画家は金持ちが何を求めているかを予測しつつ制作し、一年も前から画廊の順番を待っているのである。そして第二次大戦後の現象として注目されている美術品の蒐集にしても、その眼をみはるような馬力は、やはりあのフロンティア・スピリットのなせるわざであり、それは美術館というどちらかといえば保守的な社会機構の中にあつて強力に作用しつつある段階といえる。

アメリカは広大な国であり、したがってその風土や氣質が大陸的であることは当然である。このことは外来文化を受容する場合にも重要な意味をもつてくるのであつて、同じ東洋美術でも中国やインドのものはすんなりと入るが、日本の美術となると多少感覚が合わなくなるようだ。これは決して日本美術が中国やインドのそれに比べて野蠻であり下等であると判断されているからではなく、むしろ反対で、日本のそれは、小さすぎ、少なすぎ、単純すぎ、そして繊細すぎて、キメの荒い大陸的感覚の枠からこぼれてしまうといった感じなのである。

シカゴ美術館(シカゴ・アート・インスティテュート)の東洋部長であるジャック・スウェル氏はこう説明する。「私が美術館のために東洋美術を購入したいと思つて、その候補作品を提出して出資者たちに説明する場合、インドの銅製シヴァ神舞踏像ならば一分間でOKがとれるのだが、日本の仏像など出そうものなら、なんでお前はこんなものを欲しがるのかとやられてしまうのだ」と。つまり一般的にいって日本美術のもつニュアンスを感じ分けてもらうためには、まだまだ時間がかかるとみてよい。これには根氣よく啓蒙を続

けて行く以外に道はないのである。

## アメリカの中の東洋

一九六四年にアメリカのアジア協会が発行した「アメリカ美術館における東洋コレクション案内」(英文・A Guide to Asian Collections in American Museums, Asia House, 1964.)という小冊子には四十四の美術館が紹介されている。その中には十数室を擁する大東洋部をもつものから、小規模でも世界的名品を有する美術館も入っている。ところでこの小冊子が扱っている東洋には次の諸国が含まれている。すなわち、アフガニスタン、ビルマ、カンボディア、セイロン、中国、インド、インドネシア、日本、朝鮮、ラオス、モンゴル、ネパール、パキスタン、フィリピン、タイ、チベット、ヴェトナムの十七カ国である。もちろん中心は、インド、中国、朝鮮、日本、東南アジア諸国であるが、東洋という対象を捉えるのに、先ずこのように網羅的に総括するところがアメリカ的といえるのであって、やはり大陸が大陸を把握する場合によるやり方である。東洋の盟主を自認する日本が考える東洋は、決してこのような分析的なものではなく、もっと莫然としたものである。「アジアは一つ」式の考え方は東洋的発想には違いないが、大陸的なものではない。東京国立博物館たりとも、ネパール、パキスタンはまだしも、ラオス、モンゴルに至っては関心もあるまい。つまり日本が他の文物を受け入れるときには、自からの趣味嗜好にかなったもののみを消化吸収する傾向があるのに対して、アメリカにあつてはとにかく資料は広範にあつめ、客観的評価を下し、各々の特質を明確化し、その存在理由を示す方向に進むのである。そしてこのような方法が自然に受取られるところがアメリカ的であり、大陸的なことなのである。

同じ東洋美術でも、中国美術と日本美術に対する親近感の割合は、ちょうどアメリカにおける中華料理と日本料理の普及度に比例しているように思える。アメリカに限らず中華料理は世界的に普及し賞味されている。もちろん背景には国際的に勢力を伸張している華僑の影響も無視出来ないが、やはり中華料理のもつ大陸的な包擁力といった力が作用しているように思える。これに対して日本料理は

いかにも淡泊であり、特殊な興味本位の受け取られ方をしている。つまり一寸気がきいている程度で中国料理のもつしつこさ、ねばっこさがない。そうなればアメリカのようなキメの荒い大陸的な嗜好にはピンと来ないのである。アメリカにある日本料理店の数は次第に増えてはいるものの、中華料理店の一割もないだろう。アメリカの日本料理店については詳説をさけるが、そこには一品料理ももちろんあるが、味噌スープにはじまり、さしみ、天ぷら、すきやき、テリヤキ、茶漬けというフルコースがある。日本ならさしずめその中の一品ずつが立派にディナーとして成り立つものを全部網羅してやつと大陸的食欲を満足させることができるのである。にぎりずしなどは食前酒（チリツブ）のつまみくらいに考えている人もいる。料理の話が長くなってしまったが、日本の美術はちょうどこの日本料理のあり方と似ているのである。ひとつひとつ取り出せば、たしかになかなかオツなところがあり口あたりもよく洗練もされている。しかしそれだけのことにされてしまうのである。中国美術にあるような迫力が感ぜられないのだ。もつとも中国美術のアクの強さ、しつこさを敬遠する人もいるが、嫌われることはそれなりに影響を与えているわけであり、日本美術はこのような意味で嫌われもしないのである。

アメリカの美術館における東洋部門の陳列には、中国、インドの作品が圧倒的に多く、日本のそれは先ず全体の一割程度が普通である。これは東洋美術における過去の総生産量からくる比率によるもので、特に日本が冷遇されているわけではないが、一般鑑賞者の印象には中国やインドに比べて日本のそれが貧弱にうつることは止むを得ない。しかし作品の質の面からいっても中国の青銅器や石像彫刻、陶磁器、インド彫刻のような重厚なものに対して、能面に浮世絵程度では大芸術と阿克セサリーのひらきが出てしまうのである。もつとも戦前日本美術がまだそんなに重視されていなかった時分、中国やインドのそれはすでに相当に評価され、多量の優品が流入しているのに対して、戦後は日本を含めて各国とも美術品の海外流出をかなりきびしく制限してしまったので、結局日本美術の優品は、ほとんど海外において重要な地位をしめるに至らなかった事情もある。

こと芸術品に関しては、やはり天下の名品というものが物をいうのであり、ギリシャ彫刻の逸品ミロのヴィーナスやイタリヤ絵画の至宝であるレオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザが、パリのルーブル博物館に存在することに何の異和感をも感じないようなもの

で、西洋の美術は、西洋内において多少の移動があつてもその評価に變動はない。しかし如何なる名品でも、日本の美術は欧米において鑑賞せられる限りに於いて、東洋という觀念なしに純粹にその美的価値が西洋美術と同質同等に評価されることは先ずないのである。そして中国に対する関心は、欧州に輸出されたおびただしい数の陶磁器によつて培われ、インドの文物は東印度会社以来の横領物として流入し、それらに対する西欧における鑑賞経験はある程度まですでに養われているが、日本美術の中でこれらに匹敵するものといへば浮世絵版画くらいである。そして浮世絵に関するかぎり、その欧米諸国への滲透度はかなりの深さと認識をもたらししている。浮世絵についてはその総量において、欧米の蒐集は日本のそれをはるかに凌駕しているのである。

### アメリカの中の日本

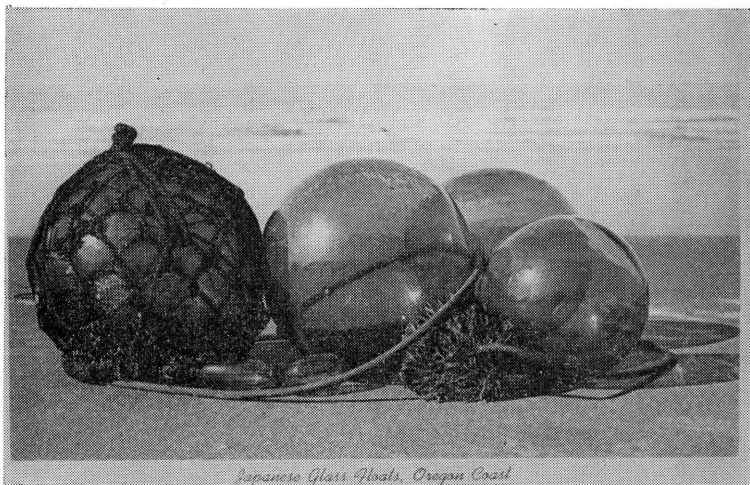
全体の比率からいへば、アメリカにおける日本の知名度、日本について知っている度合は欧州のそれよりは格段に高いように思う。これは第二次大戦後の日本進駐軍のおかげである。戦後の日本が占領下にあつた時代に、直接日本に駐留していた米軍はもちろん、他のアジア地区の軍人も含めて、移動などの理由で日本を知つたアメリカ人の数は相当数にのぼっている。しかもそういつては失礼かも知れないが戦争がなかつたならば、とても日本旅行など試みもしないし、また経済的にも出来なかつたであろう階層の人びとまでが日本の空気を吸い、しかも勝利者としての好遇を体験して帰国している事実の意味は大きい。観光業者が如何なる大金をもつて日本を宣傳しても来てくれそうもない人びとが、戦争のおかげでやつて來得たわけである。そして日本女性を花嫁にした人はもちろんだが、今日アメリカにいるこれら戦争を機縁とした日本体験者には、わが生涯最良の日々としての日本の想い出が宿っているのであり、その家族や子孫に及ぼした影響もまた大きいものといわなければならない。

このようにしてアメリカにおける日本ブーム發生の基盤は次第に整つてきたが、日本人が考へている日本的なものと、西洋人である彼らの見方との間には、思ひがけない相異が生じたのである。例えばアメリカに支店をもつ日本のデパートの、日本人係員が仕入れる

日本的なものは、ちょうど日本の航空会社のアメリカ支店のウィンドウ装飾のようなもので、障子にちようちん、扇子に日本人形といった感覚のものであり、見本市ともなると、昨日まで銀座でコーヒーを飲んでいたミニスタイルの日本女性が出張して、振り袖姿で茶を立てているようなものである。ところがこれが売れない。はじめは一寸興味を示すけれども、それだけのことになり、デパートの支店は閑古鳥から閉鎖のコースを迎える例も出てくるのである。そして生きのこるのはアメリカ人が仕入れをする日本趣味の店ということになる。どこが違うのか。つまり彼らは大陸の大ようさで自分の趣味嗜好によって日本を受け入れるからである。日本人の仕入れ係が縁起でもないテンから考えもしなかった仏壇用の金の蓮華が、前衛彫刻的装飾品としてマントロピースの上に飾られ、黒ぬりの位牌がメニユースタンドに使われたりするのだ。坊さんの七条袷褌がピアノ掛けの寸法に合致すれば、なかなか豪華な装飾品にもなるのである。となれば古い七条袷褌が売れて売れて仕方がない。因みにアメリカの関税法では百五十年以上古いものは古物扱いで税金がないから古いやつが狙われる。注文を受ける京都の業者は、はじめはお寺さんを片っぱしから廻って、金びかの袷褌にお布施を加えて交換する下取りセールによって需要をまかなう。遂には西陣の織屋で製産するが、機械油のにおいがついては古物にならないから、水洗式でないトイレの中にぶらさげ、アンモニヤの作用によって新品を古物に変造して輸出する。「いくら日本は歴史の古い国か知らないが、こんなに大量に古い袷褌がある訳はない」と不審をいだいた税関が、袷褌の端をめくってみるとミシンがかかっている。「ミシンは百五十年前には存在しなかった。したがってこの袷褌には新品として物品税をかけますぞ」で、さしもの七条袷褌ピアノ掛けブームも終りを告げた、という話も生れるのである。

このような例はきりがないのでこのくらいでやめるが、ポストン郊外にあるマサツセツ州セーラムのピーボディ博物館には日本の民族資料の大蒐集があり、日本のものなら大工道具から下駄、のしぶくろにわりばしまで揃っているところで、この種の蒐集は日本ではみられず、特筆せらるべきものであるが、この博物館で発売している唯一枚の日本品の絵はがきは何と「仏壇」である。





*Japanese Glass Floats, Oregon Coast*

### 遙かなる国日本

一方、いかに地球上の距離感が縮り、日本に対する認識が深まったとはいえ、やはりアメリカ大陸から望見する日本は、遠い「極西」にちがいないのだ。

アメリカ太平洋岸のポートランドの街で売っている絵はがきに「オレゴン海岸に打ち上げられた日本の漁網の浮きを使用したガラス玉」がある。ここは太平洋を渡る黒潮が、日本の三陸沖から千島、アリューシャン、アラスカの各沿岸を経て辿りつくところであり、冬も比較的暖い土地柄である。そしてこの黒潮は同時に東洋への憧憬をはこぶことになる。そして太平洋をはるばる漂流した日本漁網の「浮き」に使われたガラス玉が、ちょうどこのポートランドあたりの浜辺に打ち上がるのである。人びとはそれを拾って自宅の庭の芝生の上にアクセサリーとしてところがおく。時には色電球を仕掛けたりするのだ。そして「これは竜の目玉だよ。太平洋をこえて東洋からやって来たのだ」といって自慢する。日本流に言えば「遠い島より流れ来る椰子の実ひとつ」であり、このガラス玉には東洋への誘いという夢があるのだ。このポートランドの絵はがきにある「ガラス玉」と、それを芝生にころがして愛でる気持は、ある意味でアメリカにおける日本美術のあり方を端的に象徴しているように思えるのである。

## 日本美術の現状

ではここで、アメリカにおける代表的美術館における東洋美術、なかんずく日本美術の現状についての様相を記述してみよう。アメリカの美術館は大別して、

(一) 大美術館で経済的基盤もあり、名品蒐集をつづけているもの——ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ワシントン・ナショナルギャラリーなど。

(二) 小規模ながら特徴ある基本的蒐集を中心に整備されたもの——ペンシルヴァニア大学附属美術館、ハーバード大学附属フォッグ美術館など。

(三) 新興都市の美術館で、資力にものをいわせて名品蒐集を企画しつつ、啓蒙教育に主眼をおく活動的なもの——ロスアンゼルス・カウンティ美術館、ダラス、ヒューストンの美術館など。

(四) 特色あるコレクションと広く世界から名品を寄せてテーマ展観を併催するもの——ニューヨーク・近代美術館、グッゲンハイム美術館など。

(五) 美術学校やデザイン・スクールの附属として教育施設的性格をもつもの——ロードアイランド美術館など

があり、それぞれに個性があつて大小各種様々であるが、積極的かつ意欲的運営を行なっている。そしてその八割は東部大西洋岸、特にニューイングランド近辺に集つている。しかし太平洋岸には東洋美術を重視する美術館があり、内陸部にも優れた美術館がある。ここでは紙数に限りもあり、アメリカの美術館に存在する日本美術の全貌を捉えることはできないが、地域別にみながらその概要を紹介してみたいと思う。

## ポストン・フリア・メトロ

アメリカ美術館の日本美術コレクションで、量質ともにもっとも重要なものは、ポストン美術館とワシントンのフリア・ギャラリ―であり、そしてニューヨークのメトロポリタン美術館、クリーブランド美術館、シアトル美術館といったところがこれに続くものである。なかでもポストン、フリア、メトロの三館の蒐集は他館に比して格段に歴史が古く、周知のごとくポストンはフェノロサに岡倉天心、フリアはチャルス・フリアというアメリカにおける日本美術蒐集の先駆者たちの努力に負うところ大なることはいうまでもない。これらの蒐集に共通することは、その蒐集が明治年間にはじまり、戦後出来た文化財保護法のような法律による美術品の海外流出をチェックする体勢のなかつた時分からなされたものであることである。日本自体においても今日ほど文化財に対する関心が高まっていなかったこともあって、その蒐集は比較的自由に、そして経済的にも容易に行なえたのである。もっとも美術史学的研究もまだ幼稚な段階にあつたために、評価の点においてはいろいろ問題も多く、このことは日本美術蒐集にとって一長一短であつたわけである。すなわちポストンではフェノロサや岡倉天心の日本美術観から、仏画や狩野派に重点がおかれてゐるし、フリアでは琳派に興味が集つてゐるように、それがコレクションの特徴にもなり、また一方偏重にもなつてゐるわけである。いずれにせよポストンとフリアは長短相おぎないつつ、先ずはアメリカにおける日本美術の二大拠点としていわば本山的性格をもつてゐる。そしてポストンにはオランダから招へいされた新キューレーターのフォンティン氏が着任し、意欲的活動をはじめており、今年創立百年を迎えるこのシニセ東洋部の一大改革に着手してゐる。一方アメリカ唯一の東洋専門美術館として、着実かつ中核的發展を上げてゐるフリア・ギャラリーは、ポープ館長、スターン副館長の両東洋美術専門家によつて一層充実したものになりつつある。そしてポストンはハーバード大学と、フリアはミシガン大学との関係が密接であり、研究面においても近い将来この両グループは相当の成果をあげてくることと思われるのである。

## ホノルル

ハワイはアメリカ合衆国五十番目の州に昇格して以来、その文化的地位は次第に重要さを増しつつある。特にホノルル美術館（ホノルル・アカデミー・オブ・アート）とハワイ大学東西文化センターは、文字通り太平洋のかけ橋としての役割を果しているが、それがホノルル美術館の陳列にも明瞭にあらわれている。このギャラリーでの東洋部と西洋部の比率はちょうど半分づつであり、アメリカから東洋へ向う旅人はここではじめて東洋的雰囲気に触れることになるし、日本から行けば逆に西洋文化への接点となるのである。

美術館の外観はポリネシア風の素朴なものであるが、中庭の花壇にはさすがに美しい色とりどりの熱帯植物が咲き乱れ、子供たちが金魚の泳ぐ池に足をつけながらスケッチをしている姿もハワイらしい風景である。東洋美術では日本絵画と中国、朝鮮陶器がよく、西洋の近代画も珠玉品が揃っている。設備の点では厚い火山岩の二重壁の間に空気層があり、この地の気候風土に適合した建築構造をもっている。前館長であり顧問のグリフィン氏およびハーバード出身のネリオ氏の両氏が日本部門の充実をはかっている。そして日系市民の比率がアメリカで一番高い点からも、日本部の将来の発展が期待されるのである。

### サンフランシスコなど

サンフランシスコには如何にも東洋への門戸といった風情があり、ゴールデン・ゲートの鮮やかな朱色の造型がこの街の性格を象徴しているようにみえる。街を行く人びとの顔も黄・黒・白が混ざりあっていて興味深い。ゴールデンゲイト公園にある市立のデ・ヤング記念美術館には国際オリンピック会長として有名な実業家ブランドー氏の東洋美術蒐集品を収めた新館が一九六六年夏開館し、東洋への入口としてのこの街の魅力が一層深められることになった。ブランドー・コレクションにおける日本美術は、未だ質量ともに中国その他東洋美術品に比べて少いが、主任のダルジャンセ氏と近郊にあるカリフォルニア州立大学やスタンフォード大学グループとの今後の活躍発展が大いに期待されるところである。

一方ロスアンゼルスは、ニューヨーク、シカゴにつぐアメリカ第三の都会として急速に発展を続けており、豊かな経済力の裏付けを得て文化面においても各分野にわたって新生面を拓いている。数年前に完成したロスアンゼルス・カウンティ美術館は、超近代的な外貌をもって未来への飛躍を象徴している。東洋、なかならず日本部門におけるジョージ・クワヤマ氏の活躍が期待されるところである。

### シアトルなど

シアトル美術館は、太平洋に続く波静かな入江にのぞむ高台にその瀟洒な姿をみせている。ここの美術蒐集品には現館長リチャード・フラード氏の高潔な人格が反映していて、愛すべき珠玉の名品が多い。そしてその大半は先代のユージン・フラード氏の寄贈品である。美術館もアット・フォームな雰囲気につつまれて気持がよい。このフラード氏は館長と同時に美術館の運営財団の理事長をも兼ねており、その点からもユニークな美術館である。シアトルの南隣ポートランド市の美術館には約二万枚にのぼる浮世絵の蒐集がある。さらに南に下って、オレゴン大学附属美術館には小規模ながら東洋部があつて日本のものもポツポツあつめている。館長のオレゴン大学美術教授のヴォーディング氏は、同志社大学に交換教授として来日されたことのある人で、夫妻とも熱心な日本美術ファンである。ユージンの郊外には奈良の長谷寺建築にヒントを得たモーターがあり、これは長谷寺の山腹に立体的に連続した堂宇の姿をそのまま取り入れたもので、日本古典建築の影響を示す一例である。

### クリーブランドなど

クリーブランド美術館は、ニューヨークのメトロポリタン美術館につぐ美術品購入費をもっているという噂のとおり、アメリカにおける大重工業都市としての財力を背景に、東洋通の実力派館長シャーマン・リー博士を擁しての蒐集力は注目に値する。

日本美術部門も前東洋部長ハワード・ホリス氏時代から蒐集したものに続々と新収品を加え、新館の教室にところせましと陳列していて壯観である。且下日本部の増築計画もあるが、特別室で行なう「日本の屏風展」なども全部館藏品でまかなえるのだからすごい。

リー館長はかつてシアトルのフラー館長の下で活躍されていたこともあり、フラー氏ゆずりの洗練された美的感覚の持主である。進駐軍の文化担当官として日本にあった時分に、その特権を最大限に利用して日本美術を研究した人であり、アメリカにおける東洋美術の領域においてもっとも将来を期待される人である。

クリーブランドのほかに、一九六五年米加巡回日本古美術展の会場となったデトロイト美術館も、近時東洋部門の充実に意欲をみせている。デトロイト近郊のアン・アーバーにあるミシガン大学は日本の諸大学と姉妹校関係を有し、東洋研究に力を入れているところで、フリーア・ギャラリーのスターン副館長もこの出身であり、フリーア・ギャラリーとの関係は前にも一寸ふれたが、中国絵画史のリチャード・エドワーズ教授、日本南画研究のフレンチ氏と日本通の学者も揃っている。コレクションとしては戦後日本の文化財関係担当のチーフであったブラマー氏の蒐集品が一括保管されている。

## シカゴなど

浮世絵で著名なシカゴ美術館（シカゴ・アート・インスティテュート）は、ジャック・スウェル東洋部長の意欲的な活動で、東洋部全般に充実の気をみせている。浮世絵のバックingham・コレクションについては、マーガレット・ジェントルス女史が専ら管理研究に当たっている。もっともシカゴ美術館の西洋部門、特に印象派の作品はほう大なものであるから、少々東洋部が充実してもかけがえのないことはいたしかたないことだろう。

シカゴから一寸距離があるが、ミネアポリス美術館の日本美術蒐集は、この地にある日本美術好きのゲイル氏のコレクションが入れば一段と充実することは間違いない。近時ゲイル氏が寄贈した雪村の花鳥図屏風は代表作の一つであるが、ゲイル・コレクションの中心は肉筆浮世絵であり、アメリカ民謡で名高い「ミネトンカ湖畔」の牧場で静かに肉筆浮世絵を鑑賞しているゲイル氏の姿は印象的である。

## カンサスシティなど

中国美術に関する限り、カンサスシティのネルソン・ギャラリーは、アメリカ屈指のコレクションといふことができる。それは、ボストン、フリア、メトロポリタンにつぐ特色のあるもので、ペンシルヴァニア大学附属美術館や、ハーバード大学・フォッグ美術館などの美術館に匹敵するものである。しかしながら中国美術が優秀であればあるほど、東洋部門の一部を形成している日本室のそれが貧弱に見えることは何とも情けないものである。

同じ内陸部のロッキーマウンテンのデンヴァーは、第二次大戦中在留邦人や他の敵国外人などが抑留キャンプをはっていたところで、戦後もそのままこの附近に定着した人が多く、一方黒人の移住もさかんなところから、人種のルツボのような感がある。デンヴァー美術館ではこのような人たちに祖国の文化を教え、民族としての自信をもたせようという観点から、その目的のために努力している。

アフリカのニグロ芸術の展覧をしたとき、はじめは劣等感から寄りつかなかった黒人系の人びとも、ついには遠い祖先たちが生んだ造型に魅せられ、民族としての自覚と誇りをもつようになり、近郊からの参観で超満員になったという。美術品のみがもつ不思議な力を示す挿話であるが、同じ意味で、日本の美術についても何とかして充実してもらいたいと思つた次第である。

同じような話であるが、ボストンでタクシーに乗ったら運転手が「あなたは日本人か。自分は美術館にある日本の絵巻——平治物語・三条殿焼打の巻——が好きで時々見に行くのだ」というのをきいて感動したことがある。これも美術の名品というものが、如何に直接的に人びとの心に何物かを語りかけることが出来るかということを示す挿話であり、それは民族や風土、そして言語や時間を超越したものであり、一点でもよいからよい美術品を日本の代表選手として送り出さねばならないことを示す好見本である。

以上、アメリカ各地の主要美術館における日本美術の蒐集状況について述べてきたが、個々の作品については殆ど触れていない。これは美術品を名前だけ列記してみてもはじまらないからであり、一方美術館や大学関係者の氏名を挙げたのは、美術品は言語を介さず

に視る者に何物から語りかけはするが、やはり一般鑑賞者に対しては啓蒙を必要とするものであり、特に日本美術という特殊な領域のものを理解普及せしめるためには、やはり直接その仕事にたずさわる人びとの熱意によるところ大であるからである。

また個人コレクションについては、ワシントン・D・Cのハウゲ氏の水墨画、ニューヨークのパワーズ氏夫妻、バーク氏夫妻などの熱心な日本美術蒐集家がいる。これら個人コレクターも、公共美術館での展観や、図録の製作などを常に意図しているので、その内容を知ることが可能であり、美術品を単なる趣味や財産として蒐集するだけではなく、公的なものとして意識し活用方法を併せ考慮していることは見習うべきものである。

### 結語・日本の若い芽

アメリカにおける日本美術の名品については、一九六六年爾山順吉氏が「西洋における日本美術」(Japanese Art in the West. Mayuyama, 1966)という立派な図録を刊行され、その概要を世に紹介された。もちろんこの中にはヨーロッパにあるものも含まれているが、今日アメリカにある日本美術に関する書物でこれにまさるものはない。

近時(一九六九年)、プリンストン大学島田修二郎教授の編集による学研刊「在外秘宝・欧米蒐集日本絵画集成・全三巻」(筆者共著)が発行された。これは対象が絵画に限られてはいるが、日本の絵画作品が海外諸国のどこにどれだけあり、どのように受取られているかについてその実態を示すと同時に、学問的裏付けを与えた初めての本格的出版であり、そこにはアメリカにおける東洋美術、就中日本絵画享受の様相が端的に現われていて興味深い。その意味でこれらの出版が世界における日本美術の価値高揚に果たす役割は大きい。もともとアメリカにおける日本美術の研究面についてはまだ初歩的段階であり、これらを土台に一層の発展がのぞまれる次第である。

一方戦後の発見により学問的に評価を得た作品が、かなりの数アメリカに移動していることは注目してよい。そして美術館自体ヨーロッパ風の資料陳列館式の大美術館主義から、人間対美術の対一の関係を強調する傾向が、アメリカにおいて育ちつつあることは注



目に値するものがある。

「あなたが美術館を創る」という標語が、ある美術館の正面に提示されていたが、アメリカ人のフロンティア・スピリットという建設的意欲が、美術館というどちらかというと保守的なものの中にまで強力に作用し、東洋そして日本の美術に対しても本気で取り組んで来つつあることは、東西文化交流の将来および今後の世界文化の動向に対し、重要な意義をもつものであり、注目すべき現象といえよう。(一九六九・八・三二)

後記・本稿は一九六八年、アジア文化研究所発行「アジア文化」(Vol. 4, No. 2)に掲載された拙稿「西洋の中の日本」の一部に加筆したものである。